

論文要旨

研究目的

本研究の目的は、乳児院で働く看護師が看護ケアを通してやりがいを得るに至る心の動きを明らかにすることである。

研究対象と方法

過去に乳児院以外の医療機関において就業経験があり、現在、関東地方の乳児院で3年以上の就業経験を有している5名の看護師を対象とし、インタビューガイドに基づいた半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる手法にて分析を行った。

結果

分析の結果、44個のサブカテゴリーから、14個のカテゴリーが導き出された。また乳児院で働く看護師が看護ケアを通してやりがいを得るに至る心の動きを、乳児院で働く看護師がどのような思いで乳児院で働くに至ったかの心の状況、その思いをどのような看護によって実行したか、そしてその結果、どのようにやりがいを得るに至ったかを、それぞれ状況、行為、帰結として表した。状況のカテゴリーは【乳児院で働きたいという思いがある】、【乳児院で資格を活かし知識を発揮したい】、【子どもとずっと密着した関わりがしたい】、行為のカテゴリーは【子どもとの距離を縮める】、【子どもの将来を見据えた関わりをする】、【看護師としての役割を発揮する】、【子どもの成長を見守る】、【親と子どもの絆を深くする関わりをする】、帰結のカテゴリーは【子どもとの距離が縮まる】、【退所後の子どもが気になる】、【自分の看護の成果が分かる】、【子どもとの関係が築ける】、【親と子どもの関係性が築ける】、【乳児院の看護師としての役割を自覚する】であった。

結論

- I 乳児院で働く看護師はもともと子どもが好き、子どもと関わりたいという思いを抱いていた。また乳児院において看護師として発揮するために、入職前にその専門性を高める必要があると考えていた。さらに子どもの生活の場において、生活の中に24時間入り関わりたいという気持ちが強く、特に乳幼児期の人格形成の重要な時期に、その成長発達を支え、将来を見据えた関わりをしたいという気持ちを抱いていた。これらは、乳児院で働く看護師のやりがいとしての基盤にあった。
- II 乳児院で働く看護師は慣れない環境下において、試行錯誤しながらも子どもと関わり、親との関わりを通し、看護ケアの効果が実感できた時にやりがいを感じていた。
- III 乳児院で働く看護師は、もともと子どもが好きで乳児院で働きたいという思いがあり、それを実現させ、試行錯誤しながらも子どもへのケアを看護行為として行い、それが奏功した時に、やりがいを得るに至っていた。また乳児院における看護師の役割の自覚をしていた。